《資　　料》

実験的メセナの実施報告 その４ および全体的総括

菅　家　正　瑞
（長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」代表）

１．はじめに

本研究会は昨年（平成21年10月27日（火）～12月19日（土）），実験的に第４回目の「メセナ」（mécénat）(注1)を実施した。「企業メセナ」の研究にあたって，その実態・内容を模擬体験することはメセナ研究に有意義であろうと研究会の発足時に考えたからである。その結果については，いわば「アカデミック・メセナ」として既に報告している(注2)。しかし，メセナ活動は最初から意図的に計画したわけではなく，一種の偶然から始まったものである(注3)。今年度も引き続き実験的にメセナ実施したが，前回（第三回）と異なるのは，①これが最後のメセナになることから，これまでの活動の締めくくりにふさわしい内容にすること，②そのためには従来より費用がかかると思われるので，寄付活動を強化すること，③①の一つとしてピアノ協奏曲を加えたこと，④地元長崎出身の演奏家との共演としたこと，⑤アウトリーチ活動(注4)として，島の学校を訪問したこと，などである。

本来「企業メセナ」とは，実施企業が自主的に計画し実行されるべきものである(注5)。しかし，メセナという言葉さえ一般市民はもとより，企業経営者にも知られていることが未だに少ない長崎で，一挙に本格的企業メセナを期待するのは無理というものである。まずは啓蒙活動的に実施し，その意義を少しずつ関係者に理解して頂くことが必要であろう。

これまでの活動によるものかどうかは不明確であるが，「企業メセナ」という言葉と活動は，少しずつ企業や市民に浸透し始めたように思われる。しかし，長崎における経済活動は依然として停滞しており，リーマン・ショックがさらに輪を掛けたように見受けられる。そような状況の中で，最後の活動として，今回はどのようにメセナが実施され，その成果はどうであったであろうか？新しい試みは実を結んだであろうか？前回の報告書と同じく，先に結論的に言えば，最後も成功と失敗のモザイク画であった，と言えるであろう。その経緯を報告することは，スポンサー企業へのアカウンタビリティー（説明責任）である。ここに本報告書を公表する所以の一つがある。

注

1．メセナとは芸術文化支援を意味するフランス語である。古代ローマ帝国の初代皇帝「アウグストゥス」の右腕と言われた「マエケナス」（Maecenas）が芸術や文化を手厚く擁護したことから，その名をとって「芸術文化を擁護，支援すること」をメセナと言うようになった。

（社）企業メセナ協議会（編）『メセナマネジメント』ダイヤモンド社　2003年，245頁 参照。

2．①拙稿「実験的メセナの実施報告」『経営と経済』長崎大学経済学会 第86巻第３号 2006年12月，225頁以下 参照。

②拙稿「実験的メセナの実施報告」その２『上掲誌』長崎大学経済学会 第87巻第３号 2007年12月，参照。

③拙稿「実験的メセナの実施報告」その３『上掲誌』長崎大学経済学会 第88巻第４号 2009年３月，参照。

3．そのいきさつについては，上掲資料①を参照されたい。

4．「アウトリーチ」(outreach)とは，一般の人々に芸術に対する潜在的なニーズや関心を喚起することで，芸術文化に関わる人々の「関係者の枠」を出て，日頃あまり芸術に触れる機会がない人や，関心がない人々に対して，なんらかの働きかけを行うことである。

（社）企業メセナ協議会編『上掲書』，239頁 参照。

5．「企業メセナ」が何故に企業にとって必要かについては，拙著『環境管理の成立』千倉書房 2006年，特に，第１章 環境管理の成立，第７章 環境志向の市民化管理，を参照されたい。

２．経　　緯

(1) 実施決定までのいきさつ

まず，これまでの報告書と同様，今回もはじめに「メセナ」の実施に至った経緯について簡単に述べる。最初の経緯については2006年報告(注1)をご覧頂きたいが，きっかけは大室晃子氏（以下大室と言う）(注2)による単なる演奏会実施の打診であった。それから一連のメセナ活動が始まったのであるが，報告者にとっては初めての経験であったので，その経緯は試行錯誤の連続であった。時間的余裕もなかったので，必要な資金も企業メセナ研究会への寄付金をあてた。「アカデミック・メセナ」と述べた所以である。

２回目は初回の経験を生かす事が出来たし，時間的余裕もあったので，本格的な「企業メセナ」の実施を目指した。また，同時に大室のピアノだけではなく，チェロとヴァイオリンを加えたピアノトリオを実施した。共演者であるチェロ奏者は，著者の旧来の友人である奈切敏郎氏，ヴァイオリンは本学教育学部の加納暁子准教授（以下加納と言う）であった。さらに，コンサート内容の充実を図るために演奏の「テーマ」を設定した。２回目のテーマは，「ライプツィッヒを愛した音楽家たち」とし，J.S.Bach と F.Mendelssohn の作品を採り上げた。問題は，演奏者も増えたし，ホールも借りたので，どのようなスポンサーに協力して頂けるか，必要な資金が集まるかどうかであった。なんとか資金的には間に合ったが，演奏者３名というのは財務的に極めて窮屈であった。企業経営における人件費の重さを，ほんの少しではあるが身に染みた思いであった。また，集客と日程については初回が初めてにしては上出来であったので，油断してしまった。まさに，経営学でよく使われる言葉「成功は失敗の元」である。

続く３回目は，２回目の財務的困難性に懲りて演奏者を減らし，大室と加納による二重奏を中心とするプログラムとした。テーマは「フランスのエスプリをあなたに」とし，プログラムもフランス音楽を中心に組んだ。時期は

10月を避けて11月５日から７日とし，集客については，無料の「特別招待券」を発行し，スポンサー企業や関係諸団体に配付すると同時に，市内の主要プレイガイドに置かせてもらった。また，チラシについても，企業メセナのイメージを出すために，中央に「『良き企業市民』をめざして」というコピーを置き，その下にスポンサー企業を載せた。この「特別招待券」配付作戦はそれなりの効果を発揮し，メイン会場である「チトセピア・ホール」には約300名の聴衆が集まった。

第３回も前年度に引き続き，本企画を「企業メセナ」として実施することにしたので，スポンサー企業を見つけることは必要最小限の条件である。また演奏家を２人に減らしたといっても，資金的問題の困難性は同じであった。前年度と同様に無理を言って出演料を大幅にダウンして頂いたので，スポンサー企業探しは不可欠であると同時に，本企画の本質的な問題になってしまっている。結果としては，スポンサー企業は何とか集めることができたが，資金的にはぎりぎりでかなり苦労した。

この頃には，第４回目となる最後の演奏会の概略を考え始めており，内容はピアノとヴァイオリンを中心とし，ヴァイオリンは本県出身で東京で活動している松川裕子氏(注3)(以下松川という）に御願いし，ピアノ協奏曲はＬ.ｖ. Beehtoven の「皇帝」を長崎大学管弦楽団（以下「長大オケ」という）との共演という構想を立て，交渉を既に開始していた。

大室のコメント：2006年から続いている「大好きな長崎へ音楽のプレゼント」シリーズも，菅家正瑞教授が今年度長崎大学経済学部教授をご退職なさるため，いよいよ今年最終回を迎えることになりました。前回の「特別招待券」発行から形が見え始めてきたこのシリーズは，最終回にはさらに趣向を凝らそうということで，例年のようにソロ・室内楽を中心とするプログラムと，４回の締めくくりとして長崎大学管弦楽団との共演をするという２本立ての計画となりました。そして昨年12月のピアノ・コンチェルトを

以て通算４回のシリーズは，無事大盛況のうちに幕を閉じることができました。

注

１．拙稿「実験的メセナの実施報告」『経営と経済』長崎大学経済学会 第86巻第３号 2006年12月，225頁以下 参照。

２．大室の略歴は以下の通り。

東京生まれ。東京藝術大学音楽学部付属音楽高等学校，東京藝術大学，同大学院修士課程を経て2002年に渡独。フライブルク音楽大学を最優秀で卒業後，ドイツ・バーデンビュルテンベルク州立銀行より奨学金を得て，シュトゥットゥガルト音楽大学大学院に進む。同大学ソリスト課程を首席で修了し，国家演奏家資格を最優秀の成績で取得。シュトゥットゥガルト音楽大学大学院在学中，ピアノ科助手として教鞭をとり，管楽器科の伴奏助手も努める。また，イタリア「マルサラ市国際ピアノコンクール」，スペイン「ウエスカ市国際ピアノコンクール」など数々の国際コンクールでの受賞歴を持つ。

2007年の帰国まで，ドイツを中心にヨーロッパで様々な音楽活動の経験を積む。教会音楽師としてフライブルクの著名教会で定期的なミサを担当し，ミュンヘンユースオーケストラの一員としてカール・オルフ音楽祭や国内ツアーに同行。ソロリサイタルの開催とともに，ドイツ国内外での歌曲伴奏や室内楽の演奏会にも多数出演。それらの幅広い活躍がヨーロッパ各紙やTVでも度々とりあげられる。また，2006年にユーディ・メニューインの提唱に基づくヨーロッパのNPO団体「Live Music Now」専属ピアニストとなり，その経験を生かして帰国後も演奏活動の傍らアウトリーチ活動にも力を入れている。また，演奏収録やインタビューなどがNHK放送をはじめ全国各地でのテレビ，ラジオなどで取り上げられている。

これまでに，岡崎悦子，植田克己，浜口奈々，Vitali Berzon, Wolfgang Bloserの各師に師事。

現在，東京藝術大学非常勤講師。また，日本女子大学においても教鞭をとる。（社）日本演奏連盟会員。長崎県音楽連盟会員。

３．松川の略歴は以下の通り。

長崎市生まれ。県立長崎東高等学校卒業，東京藝術大学器楽科卒業，同大学院修士課程修了。

第１回ながさき若い芽のコンサートに出演，最優秀グランプリを受賞。長崎室内楽協会公演，長崎少年管弦楽団中国公演に出演。長崎県新人発表演奏会，東京藝術

大学室内楽定期演奏会などに出演。淡路島における，アマデウス弦楽四重奏団のメンバーによるコースを受講。

2004年６月，長崎交響楽団定期演奏会におけるシベリウスの協奏曲，2007年10月，ながさき音楽祭「OMURA 室内合奏団＆輝きを秘めた星たち」におけるモーツァルトの協奏曲の演奏は好評を博した。2005年～2006年，新日本フィルハーモニー交響楽団契約団員。現在，「フィルハーモニー・カンマーアンサンブル」メンバーとしての室内楽のほか都内オーケストラ公演にエキストラ出演する。「東京バッハ・カンタータ・アンサンブル」メンバー。

これまでにヴァイオリンを菅家恭子，故松村英夫，浦川宜也，藤原浜雄，Lothar Strauss の各氏に師事。聖徳大学講師。

(2) 実施内容の決定

①テーマの決定

昨年に引き続き，今年度のメセナのメインテーマは「大好きな長崎へ音楽のプレゼント」とし，その第４弾とした。さらに，サブテーマとして「ドイツ３大Ｂを弾く」(注4)とし，重厚なドイツ音楽をプログラムに組み，本メセナのコンセプトを明確にした。このようなプログラムが組めるのも，メセナならではのことであろう。最後のメセナの位置づけは，従来と同じく本格的企業メセナへの橋渡しとする。これまでの報告書で述べたように，大室は長崎という街に惹かれ，以前より長崎でのコンサートの実現を希望していたので(注5)，演奏者の意向を尊重し，初めからメインテーマは「大好きな長崎へ音楽のプレゼント」と設定し，シリーズものとなっていた。もちろん，その趣旨から今年度もコンサートは無料とする。また，大室は長崎における本格的コンサートは初めてという新人でもあったので，長崎を愛するピアニストの紹介をも兼ね，長崎を活動拠点の一つにしたいと願っている意志実現の第一歩となったのである。

要約すれば，本活動のテーマは，試行錯誤的ではあるが，１）長崎における企業メセナの普及・啓蒙，２）有望な音楽家への支援，３）良質な音楽の提供，に絞られ，その具体的目標は，１）についてはスポンサー企業の発掘，

２）３）について今回はピアノ独奏に加えて，長崎出身のヴァイオリニストとの二重奏という形で具体化することとなったのである。もちろん，その背景には，企業メセナの実態を体験しメセナ研究の一助とする，という大目標が立っていることに変わりはない。

注

４．昨年度のサブテーマは，「フランスのエスプリをあなたに」というタイトルで，フランス音楽を中心に採り上げた。「ドイツ３大Ｂ」というのは，ドイツを代表する作曲家であるＪ.Ｓ.Bach, Ｌ.ｖ.Beethoven，Ｊ.Brahms の頭文字が３人ともＢから始まることからこのように称されるようになった。

５．大室は自分自身で述べているように「遠藤周作」の大ファンであり，特に『沈黙』の舞台となった長崎（外海地区）に強く惹かれていた。第１回のプロジェクトでは，彼女の意向を汲んで外海地区の黒崎東小学校（校長：樽美寛）を訪問演奏している。なお，外海地区には「遠藤周作文学館」が2000年に設立されている。

②具体的構想の準備

１）スポンサー企業の発掘：このシリーズを通して，実務的にはこれが最大の難関であった。その趣旨からしてスポンサーは長崎を代表する，あるいは長崎経済をリードする地元企業が望ましい。さらに，いきなり地元企業のみで出発するのは困難に思われたので，企業メセナについてその趣旨を良く理解し，立派なメセナ活動を展開している日本を代表し地元長崎に大きな影響力を持つ企業の長崎事業所の協力も不可欠であると思われた。そこで，まず今回も大企業で長崎に事業所を持つ幾つかの企業と交渉したがなかなか快諾が得られず，昨年同様途方に暮れたことがしばしばであった。残念ながら協力が得られることとなったのは一事業所のみであった。

　地元企業に関しては，上述した条件に相応する企業に絞り交渉を重ねたが，長崎経済の長期的低迷とリーマン・ショックの影響など，多くの地場企業についてはいろいろな阻害要因が横たわり交渉は困難を極め

た。もちろん，快諾・即決して頂いた企業もあった。結果として，シリーズの最後を飾るにふさわしい所期の目標額に達するスポンサーを得ることは出来なかったが，これまでで最高の寄付金を得ることができた。

2）共演者の確保：ヴァイオリンについては早くから松川に打診していたが，彼女もドイツ留学などいろいろ予定を考えていたようであり，なかなか身動きが取れない状態であったが，最終的には快諾を得られた。

3）曲目の決定：曲目については，演奏者にいろいろ検討してもらった。バッハについては「ヴァイオリンとチェンバロ（ピアノ代奏）のためのソナタ第２番」，ベートーヴェンについては難曲「ピアノソナタ 熱情」，そしてブラームスについては「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第３番」に決まった。ブラームスのソナタでは，最初は１番，次に２番と迷ったようであるが，最終的には３番となった。

なお，ピアノ協奏曲については長大オケで時間を掛けて検討したようであるが，結局我々の希望通りベートーヴェンの第５番「皇帝」に決定した(注6)。

注

6．我々が長大オケに提示した条件は，演奏料いわいるギャラは不要，長大オケの演奏料として10万円を支払う，という破格のものである。また，我々の「特別招待券」を無料で長大オケの「特別招待券」と交換することとした。

３．コンサートの実施

(1) コンサートの準備

曲目，演奏会場とスポンサー企業が決まったので，コンサートのための準備活動を開始した。今回は最後ということもあり，総仕上の意気込みで準備に取り組んだ。時期，チラシの作成，集客方法，アウトリート先を慎重に検討した。

①時期：前半と後半に分け，前半は平成21年10月27日（火）から11月７日（金）の三日間とした。白状すると，実は恒例のメイン会場である旧上海香港銀行長崎支店跡記念館（以下「記念館」という）は１年前から予約で一杯で，10月30日しか取れなかったので，これに合わせて日程を組んだ，というのが実状である。結果としては，天候にも恵まれ，暑くも寒くもなく，いい演奏会日よりに恵まれた。

後半は，既に長大オケの定期演奏会の日時が12月19日（土）に決まっていたので，選択の余地はなかった。

②チラシの作成：チラシについては，下記の図のように，ドイツのバイエルン州にある，ワーグナーの大スポンサーであったルードウィッヒⅡ世が建立した，アルペンの山々を背景にしたノイシュヴァインシュタイン（Neuschweinstein：新白鳥石）城の写真をメインにし，その下にドイツ３大Ｂの肖像画を載せ，「市民から愛される企業

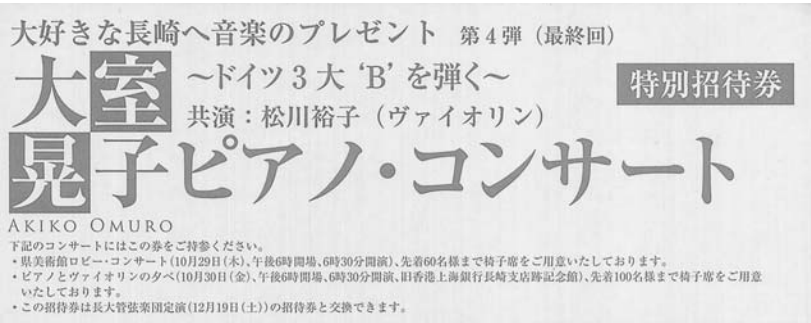
表

裏

を目指して」というコピーの所にスポンサー企業名を載せて，企業メセナのイメージを出すようにデザインした。

③集客方法：前回の「特別招待券」作戦は上手くいったので，今回もそれを踏襲した。しかし，昨年は紙質が良くなかったので，今回は少し上等にした。配布先も，昨年同様，スポンサー企業や関連団体に配付し，市内の主要プレィガイドにもチラシと一緒に置いてもらった。また，チラシは考え得るあらゆる施設に置いてもらった。さらに，長大オケから「特別招待券」を多数発行してもらい，我々の「特別招待券」と無料で交換できるようにした。さらに，「長崎交響楽団」の定演プログラムに広告を載せた。また，地元の地方紙に取材を依頼し，結構大きく掲載してもらった。

長大オケの招待券



研究会の招待券

④アウトリーチ先：長崎は海に囲まれた県である。地続きで接する県は佐賀県のみである。従って，島が多い。かつ，過疎で悩んでいる。そのような島を訪問し子供達に夢を与えたい，これはシリーズ中考えていたことである。今回は，最後であるからそのような島の学校を訪問することにした。交通手段は旅客船会社の協力を得て確保することができた。さらに，県の盲学校訪問もかねがね考えていたので，今回の会場の一つに加えた。

大室のコメント：

毎年行っているソロ・室内楽中心のプログラムでは，長崎出身で東京在住のヴァイオリニスト，松川裕子氏に共演をお願いして「ドイツ３大Ｂ」を演奏しました。「ドイツ３大Ｂ」とはドイツを代表する作曲家，バッハ（J.S.Bach，1685-1750），ベートーヴェン（L. v. Beethoven，1775-1827），ブラームス（J. Brahms，1833-1897）の頭文字がすべてＢで始まることに由来します。今回のテーマは菅家教授の希望が強かったのですが，私としても留学時代に６年住んだドイツの作曲家とどっぷり向き合うのもいいのではないかと思い決定しました。最終日に予定されている旧香港上海銀行長崎支店跡記念館ホールでの本格的な演奏会では，この３人の作曲家それぞれのヴァイオリンとピアノのための曲を演奏しようかとも考えましたが，やはりソロと室内楽と両方あったほうが多様性に富み興味深く聴いてもらえるのではないかという結論に達し，ピアノ・ソロでベートーヴェンのソナタ作品57の「熱情」と，バッハとブラームスのヴァイオリンとの室内楽曲にしました。

(2) 演奏会の開始

①長崎大学医学部・歯学部付属病院での「ロビー・コンサート」

例年通り，最終回でも長崎大学の付属病院で「ロビー・コンサート」を企画した。報告者が勤務している大学に，その付属病院でロビー・コンサートをするという形で恩返しをするのは悪いことではないだろう。病院には「患者サービス課」が設置されているので，このコンサートは，いつものように病院長の承認の下に全面的に患者サービス課に担当して頂いた。付属病院は改装中であるが，ロビーは既に昨年完成しており，全面ガラス張りの明るくて快適な空間に生まれ変わっている。演奏する側も聴衆側も，極めて恵まれた環境であった。入院患者の中には比較的元気で時間に余裕のある人たちや，コンサートを聴くことが可能な患者もいる。そのような患者さんに，生の音楽を聴いてもらうことは「音楽療法」という言葉があるように，病気の回復に役立つことができるといわれている。「音楽の力」は思った以上に大きいのである。今回は最後ということもあって，毎年御願いしていたのであるが，やっと病院長をひっぱり出すことが出来て，御礼の挨拶を頂いた。嬉しいことである。

このロビー・コンサートは，翌日の28日に予定してたのだが，急に28日からサービス課が対応しなければならない業務が入ったので27日に繰り上げたものである。幸い，演奏者も変更に対応できたので，無事開催することが出来た。多忙の中，菅原課長を始め患者サービス課および病院の後援組織である「輔仁会」に大変お世話になった。厚くお礼申し上げる。

なお，このコンサートの模様は学内広報誌である「ＣＨＯＨＯ」に掲載予定である。

付属病院でのロビー・コンサート風景

聴衆：入院患者約100名，教職員ほか約30名，計約130名。

プログラム：日本歌曲，ショパン；エオリアン・ハープ，モンティ；チャールダッシュ，マスネ；タイスの瞑想曲，ほか。

患者サービス課コメント：

当課はチラシ・ポスターを作成し，各病棟，各診療科，各中央診療施設，事務部等に配布し，院内放送を行うなど，参加者を募った。当日は，曲名の入ったプログラム及び演奏者のプロフィールを配布し，お集まりいただいた患者に楽しんでいただいた。

共催者側のコメント：

入院している患者にとって生の演奏を聴く機会は限られており，たいへん喜んでいただいた。また，日本歌曲からの選曲では，来場者も合唱する

など皆が引き込まれていた。

菅家先生，大室晃子さん，松谷裕子さんに，このようなすばらしい時間をいただいたことに感謝します。

②伊王島，高島小・中学校での「アウトリーチ・コンサート」

伊王島と高島は良質の石炭に恵まれ，明治以来，海底深く坑道を切り開き，長崎港から搬出していた。しかし，エネルギー革命の荒波に翻弄され，昭和40年代に相次いで炭坑が閉鎖された。最盛期には両島とも2,000名近くの児童・生徒が小中学校に通っていたが，現在ではその１％にも満たない児童・生徒しかいない。伊王島ではかろうじて小学校があるが，高島では小・中学校が併設されている。近くには，同じく炭坑の島であり世界遺産に登録を申請している端島（通称「軍艦島」）がある。

これらの島の子供達は本物の生の音楽に触れる機会がないので，このよう

伊王島小学校でのコンサート風景

高島小・中学校でのコンサート風景

な機会を提供することはとても有意義なことであり，その中から一人でも多くが音楽に興味を持ち，音楽が好きになってくれる人達が増えることは，社会にとっても個人にとっても生活を豊かにすることに繋がることであろう。

伊王島小学校校長のコメント：「大好きな長崎へ音楽のプレゼント」を開催していただいて。

大好きな長崎へ音楽のプレゼントを本校で開催していただきましてありがとうございました。夢のような時間を過ごさせていただきましたこと，心より感謝申し上げます。長崎市の離島に住む本校児童にとって，今回の音楽体験はすばらしいものとなりました。

１年生が，口を開けたままうっとりと音楽の世界に浸っていました。「ピアノを弾く指が，あんなに早く動くなんて!!」，４年生の男の子が興奮して話しかけてきました。「僕，ヴァイオリンを習いたい」と言う男の子もでてきました。

あのように間近で見る・聴く「ピアノ・ヴァイオリン」の音のすばらし

さ，演奏する方の集中力，紡ぎ出されるメロディの美しさ。子どもたちも，私たち大人も圧倒され，音楽に酔い浸った時間となりました。音楽のすばらしさを改めて認識いたしましたし，子どもたちは「音楽のすばらしさを存分に味わうこと」ができました。また，当日参加された地域の皆様からも「とてもよかった」「行って，よかった〜〜」という感想をたくさんいただきました。

この体験を通して，子どもたちは音楽のすばらしさを体感することができました。このような機会をつくってくださいました菅家教授様はじめ，関係の皆様に感謝申し上げます。

ありがとうございました。

松尾　功子 長崎市立伊王島小学校校長

高島小・中学校のコメント：

先日のコンサートでは，大変お世話になりました。園児・児童・生徒・教職員・地域の方々の感想等です。

〇本物のプロの演奏にふれることができたことが，子どもたちにとって一番大きな収穫だった。

〇アウトリーチという形式がよかった。高島にはホールもあるが，間近で聴けたことがとてもよかった。

〇子どもたちや島民が知っている曲をもう少し入れてほしかった。そのためにも，演奏者自身との直接打合せがしたかった。

〇幼稚園児は，コンサートの次の日には，段ボールでバイオリンとピアノを作り，「演奏ごっこ」にはまっていた。子どもたちにとっては，とても新鮮で印象的な体験だったようだ。

〇離島であるため，様々な機会をとらえ，本物の芸術にふれる取組を行っている。学校が企画しながら，地域にも声をかけ参加してもらっている。今回のような機会が今後も続くことを願っている。

高島小　教頭　田川

大室のコメント：

長崎入りした日に新聞社で取材を受け，そのまま付属病院へ直行して演奏するという慌ただしい日程でツアーが始まり，２日目の朝は長崎港から船でいよいよ離島へ。最近話題になっている軍艦島の近くに浮かぶ伊王島と高島へ向かい，まずは伊王島の小学校でアウトリーチ・コンサートを行いました。全校生徒は20人未満でしたが，中学校や地元の PTA の方々にも集まっていただき，60名ほどの聴衆を相手に45分ほど演奏しました。子どもたちに話しかけるときちんと答えを返してくれることで，コミュニケーションはうまくとれているなという実感があったのですが，船の出港時間の関係でコンサート開始時間ぎりぎりに到着し，アウトリーチ・コンサートが終わるとすぐ高島へ出発するというスケジュールで，演奏終了後に子ども達との触れ合いなどが全くないことが残念でした。やはりアウトリーチ・コンサートの醍醐味というのは，演奏の後の子供たちとの交流も重要なのではないかと思います。伊王島の後訪れた高島では，今度は船の出港時間の関係で滞在時間がたっぷりとあり，演奏が終わった後も交流の場が持てたこと，島を案内してもらう時間があったことで，お互いにしっかりと触れ合った実感がありました。

③長崎県美術館における「ロビー・コンサート」

毎回同じことを述べて恐縮であるが，やはりこれは長崎県の文化の現状を理解してもらうには必要であろう。平成17年（2005年）に開館した県美術館は，新設された長崎歴史文化博物館と並んで，文化・芸術の東京一極集中化ともいえる中で，長崎らしさを具現化した本格的な美術館(注1)と博物館である。本県は，これらの施設によってやっと本来の文化・芸術の拠点を持ち得たと言えるかも知れない。それはさておき，本美術館では催し物の一環として以前から一定レベルの演奏者にエントランス・ロビーを開放して「ロビー・コンサート」を実施している。そこで，今年度も美術館に申し入れた

ところ問題なく承認され，コンサートの運営はほとんど美術館側で行って頂いた。もはやこれは，美術館にとっても恒例の行事になった感がある。今回のこのコンサートは，最終日（翌日）の本格的な「ドイツ３大Ｂを弾く」の序奏となるものである。いつもこのコンサートの担当者である広報担当館員の建石久美子さんに深く感謝したい。

美術館でのコンサート風景

注

1．本美術館は（株）日本設計 隈研吾 の設計になるもので平成17年4月に開館し，館全体をガラス張りとしたユニークな建物である。今回，「須磨コレクション」の展示や調査研究活動等について，スペイン政府他により組織する団体「カーサ アシア」よりスペイン文化の普及に大きな功績をしたと認められ，平成18年「カーサ アシア賞」を受賞した。

共催者コメント：

「１年ぶりですね」。

この言葉も今年で３回目。長崎県美術館でも恒例となったこのコンサートも，あっという間に「最終章」になりました。2005年の美術館開館と同時に始まり，毎年恒例の行事となっていたので，本当に寂しい限りです。

当初，私は恥ずかしながら「メセナ」と言う言葉を知りませんでした。しかし，毎年開催するに当たって，このメセナ活動が少しずつですが長崎に浸透していることを，提供の企業名を拝見することで実感しておりました。芸術家が活動をすることが，昨今だんだん厳しくなりつつある世の中で，企業が集まり芸術活動を応援するという考えが，このコンサートをきっかけに更に長崎で理解され広く認知されることを心から期待したいと思います。

【アンケートのコメントより】

・平日の夜というのは魅力的。無料はベストですが，1,000円前後でもお得感があると思います。
・短い時間の小さなコンサートでしたが，気持ちのよい会場で，実力派のお二人の演奏を楽しませていただきました。
・ブラームスの第２章が気に入りました。
・お二人のピアノとヴァイオリンのコンビが素晴らしかったです。私はクラシックがとても好きなので来てよかったです。これからも長崎に来てください。ありがとうございました。
・初めての美術館でのコンサートで，ムードがあって，素晴らしいコンサートだと思います。人生の良い思い出としたいと思います。ありがとうございました。
・３Ｂのコンサートなんて最近めっきり聴けないからほんとに楽しかった。クラシックっていいなってこういう演奏会を聞くと改めて思いますね。女性らしい音色や，流れが印象的で，穏やかなおしゃべりとともに，

心地よかったです。すごくいいアンコール演奏でした。

最後に，４年間素晴らしいピアノを披露頂いた大室晃子さんに心から感謝申し上げます。また，今年は長崎出身のヴァイオリニスト松川裕子さんに出会えたことにも嬉しく思います。そして，このコンサートの開催に4年間ご尽力頂いた菅家先生を始め，提供頂いた企業の皆様に改めて御礼を申し上げたいと思います。（聴衆：約80名）

長崎県美術館　建石　久美子

大室のコメント：

３日目は，「ドイツ３大Ｂ」の最後の演奏会の縮小版として美術館で１時間ほど演奏しました。響きのいいロビー・コンサートでは毎年気持ちのよい演奏ができているので，今年も楽しみに演奏したのですが，今回は少しプログラムが重すぎたかな，と反省しています。昨年フランクのヴァイオリン・ソナタを全楽章演奏した経験があるので，ブラームスやベートーヴェンでも問題はないと思っていましたが，やはりもうすこし聴きやすい曲を挟んでも良かったのではないかと思います。しかし，私が感じたのとは逆に，美術館が行ったアンケートの集計によると，演奏には回答者全員が満足しているという結果となり，救われた気持ちです。

実は，この美術館コンサートでは大きな問題が起きていたのである。それは，ヴァイオリンの音色がホールに響かないという，音楽的に致命的な問題である。ホールは全面ガラス張り，天井は吹き抜け，床は大理石という構造になっており，木製のヴァイオリンの柔らかな音色を殺してしまうのである。また，曲目が重厚な音楽でこのホールには合わないように思われた。これは，翌日の「記念館」での演奏を聴いた時にはっきりとわかったことである。

④「盲学校」でのアウトリーチ・コンサート

社会的弱者に対して何らかの貢献をすることは，市民としての義務であろう。本プロジェクトは初めから何らかの福祉施設での演奏を企画していたが，いろんな理由で実現できなかった。前回初めて「みのり園」という施設でコンサートを実現できたことは，報告者にとってやっと借金を返済できたような気持ちであった。今回もかねてから訪問したいと思っていた「盲学校」でのコンサートが実現でき，嬉しい限りである。曲目は，小・中学校と同じに予定していたが，ある事情から急遽変更した。元々この日はメイン・コンサートである「記念館」に集中したいので，盲学校は始めの予定には入っていなかったのである。しかし，やむを得ずこのような結果になってしまい，演奏者達もさすがに夜のコンサートが不安になり，思い切って夜のコンサートの曲目を採り上げることにした。

このような難曲を果たして子供達が受け入れてくれるか，と心配であったが，それは杞憂に終わった。全身全霊をかけて演奏して流れる音楽と，子供達の心が繋がったのだ。子供達のとぎすまされた耳が目となり，流れてくる

盲学校での演奏風景

音楽に演奏者の心が伝わったのである。音楽と，演奏者と子供達の心が一体となったのを感ぜずにはいかなかった。音楽，それは人間の存在を超えた偉大な何物からの人間へのプレゼントかもしれない。

盲学校島田校長のコメント：

10月30日（金），長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」から，本校の子ども達に素晴らしい音楽のプレゼントをいただきました。国内外で活躍されている大室晃子さんのピアノ演奏，そして松川裕子さんのヴァイオリン演奏。「バッハ」「ベートーヴェン」「ブラームス」，ドイツ３大‘Ｂ’と称されるそうですが，子ども達は３人の大音楽家の名前は知っていても，実際の演奏はほとんど聴いたことがなかったと思います。耳慣れない楽曲に少々難しさを感じた子もいたようですが，本校の子ども達は皆音楽が大好きです。最後まで，耳をそばだて真剣に聴き入っていました。また，障害の重い子達も頭を揺らしたり，声をあげたり，手をたたいたりと，体全体で音楽を味わっていました。ピアノを習っている全盲の小学部児童が，演奏を聴き終えた後「指がとても早く動いていたねー」と，感動に顔を紅潮させて言っていたそうです。１時間という短いひとときではありましたが，一流の音楽芸術を直接体感できたことは，子ども達にとってとても大きな刺激になったと思います。当日は，隣接する鶴南養護学校時津分教室の子ども達も参加しましたが，本校の子ども達と同様に最後まで興味を持って演奏を楽しんでいたようです。

音響効果の芳しくない体育館，また古いピアノでの演奏であったにもかかわらず，表現力豊かで迫力ある演奏をしていただいた大室さん，そして共演いただいた松川さんに深く感謝いたします。また，今回が最後の企画だとお聞きしましたが，本校に声を掛けていただきました「企業メセナ研究会」代表の菅家正瑞先生に心からお礼申しあげます。

長崎県立盲学校長　島田幸一郎

⑤旧香港上海銀行長崎支店跡記念館におけるコンサート

「記念館」でのコンサートは，このシリーズの最後を飾る締めくくりである。今回は，12月にコンチェルトを予定しているので最後ではないが，やはり前半の終わりを象徴する特別の存在である。大室も多分気持ちは同じであろう。それは，ベートーヴェンの難曲であるピアノソナタ「熱情」に挑戦するという形で表れている。また，報告者の気持ちは，プログラムは大判厚紙カラー印刷，広告一切無しという豪華版（?）と言う形で表れている。

さて，前日の美術館で感じた不安はリハーサルを開始すると同時に，一気に雲散霧消し，杞憂に終わった。ピアノの音色にも同じことが言えるが，ヴァイオリンの音色は全く別人が弾いているように響きわたり，ホールの空間があたかも演奏者であるかのようであった。もう少し強く弾けばホールが爆発するのではないか，と嬉しい不安が湧くほどであった。松川からもう少し弱く弾きましょうか，という提案があったが，聴衆者が入れば音も吸収されるのでこのままで行くことにした。第二回目の長崎大学中部講堂の響きの悪さといい，記念館の強く美しい響きといい，演奏にとってホールの音響は決定的に重要であることを身を以て体験した。

本番は，ホールへの信頼感があってか，報告者が述べるのもなんだが，素晴らしい演奏でおわった。二人の意気込みが満席の聴衆に伝わったのか，万雷の拍手は暫く鳴りやまなかった。二人は勿論のことだと思われるが，報告者もこれまでの苦労も吹き飛び，素晴らしい演奏と成し遂げた充実感で胸がいっぱいになった。幸せの一瞬であった。

終演後，後かたづけも済み，近くのレストランで譜めくり者と会場整理のアルバイトの学生達（長大オケのメンバー）も招いて「打ち上げ」をした。皆さん，良い顔をしていたなあ。これで前半の区切がついた。次は，いよいよ「皇帝」がお待ちかねである。

記念館でのコンサート風景

大室のコメント：

最後の本格的な演奏会の日は，午前中にアウトリーチ・コンサートで盲学校を回るハードなスケジュールでした。盲学校では，夜の演奏会のリハーサルも兼ねて「ドイツ３大Ｂ」のみで演奏させてもらうことにしました。ベートーヴェンの「熱情」ソナタもトークを挟みながら全楽章演奏し，よく知られているような曲やアウトリーチ・コンサートにいつも演奏される曲は省きました。これはかなりの冒険でしたが，結果的には思いがけない効果があったようにも思われます。最近流行りのアウトリーチ・コンサートというと，わかりやすい曲を演奏し，歌や手拍子で参加してもらいつつ「楽しく」コンサートを終えるものが主流となっているのですが，クラシック音楽というのは醍醐味として「とっつきにくいかも知れないけれど本当に深いもの，聴けば聴くほど心に響いてくるもの」ということが挙げられます。特にピアノやヴァイオリンには，歴史の荒波をくぐって残ってき

記念館でのコンサート・プログラム

た名曲が本当に多いので，一心不乱に演奏する真剣な雰囲気というのを味わってもらうのも一つのやり方ではないかと思います。盲学校ではここの児童のほかにも知的障害の子どもたちにも参加してもらったのですが，彼らが最後のブラームスの演奏では引き込まれて聴いてくれているのがよくわかり，これからの活動へのヒントとなりました。

その夜の旧香港上海銀行長崎支店跡記念館ホールでの演奏会は，かつてないほどの盛況ぶりをみせました。会場は満席で立ち見も大勢おり，やっとこのシリーズが根付いたことが実感できたこと，そして私がまだ学生時代に始まったこのシリーズも，この４回目－最終回にしてようやくプロのピアニストとして歩き出したことなどを実感できる内容となったと思います。

⑥ピアノ協奏曲

協奏曲は，プロの場合事前に一回合わせ練習をして後はゲネプロ(注2)・本番というのが一般的であり，場合によっては合わせ練習無しということもある。しかし，アマの場合は少なくとも２～３回の合わせ練習が必要である。今回も事前に２回の練習をした。報告者も練習に立ち会ったが，学生達の熱意がひしひしと感じられた。ほとんのどの学生はコンチェルトは未経験だと聞いていたので（しかもプロの演奏家との），多分意気込みも普段とは違っていたのであろう。本番が楽しみであった。

平成21年12月19日(土)，長大オケと我が研究会との共催である長大オケ第61回定期演奏会はこうして始まった。プログラムの前半はA．ボロディンの歌劇「イーゴリ公」より「ダッタン人の踊り」と「皇帝」，後半はJ.ブラームスの「交響曲第２番」，指揮は国際的に活躍している河内良智氏（洗足学園音大教授，東京藝大講師）である。

演奏は，オケを含めて熱演が伝わったのか「ブラボー」の声が飛び，思った以上の好演であった。コンチェルトを組んだのは大成功であった。

コンチェルトの演奏風景

報告者の一連の活動もこれで終了である。よい経験をした。後は，「研究会」の研究成果を無事刊行するだけである。

大室のコメント：

ピアノ・コンチェルトは当然ながらオーケストラとの共演であるため，まずは共演するオーケストラの確保が必要となります。共演の候補に挙がったのは，長崎交響楽団と長崎大学の学生オーケストラである長崎大学管弦楽団でした。ちょうどどちらのオーケストラも2009年12月に定期演奏会を開催する予定が決まっていたので，菅家教授は「企業メセナ研究会」代表として既に2008年末あたりからまず長崎交響楽団と交渉を始めましたが，残念ながら長崎交響楽団には採用されませんでした。そこで，長崎大学管弦楽団との交渉に移り共演が決まり，今回の長崎大学管弦楽団の定期演奏会は「企業メセナ研究会」との共催という形に落ち着きました。そこから学生の代表とともに曲目を決めることになり，テーマは「ドイツ３大

B」であるので，ベートーヴェンの名曲，ピアノ・コンチェルト第５番作品73「皇帝」が一番いい選択ではないか，ということになりました。

10月のソロ・室内楽の演奏会の時，今回のコンチェルトまでの予定を含む「ドイツ３大B」コンサートについて長崎新聞社から細やかな取材を受

企業メセナ研究会のコンサートに出演

ピアニスト 大室 晃子

「作品の神髄伝えたい」

若手ピアニスト、大室晃子が出演しているコンサート「大好きな長崎へ音楽のプレゼント」が好評だ。長崎大経済学部「企業メセナ研究会」（代表・菅家正瑞教授）が主催し、地元企業の協力を得て、先月から長崎市内各地で開催。最終日の12月19日は長崎市茂里町の長崎ブリックホールで、ベートーベンのピアノ協奏曲第5番「皇帝」を演奏する。

同研究会は「市民から愛される企業を目指して」という観点で、企業による文化活動の支援推進を目的に発足した。2006年から企業をスポンサーにした演奏会を開催。4回目の今年は11社が支援し、病院や学校など計6会場で音楽会を提供する。

大室は初回から出演し、「演奏会に育てられ、使命感を持つようになった。感謝の気持ちでいっぱい。年々、盛り上がってきている」と、企業の支えで続いている演奏会への思いを語る。

大室は数々の国際コンクール受賞歴を持ち、現在、東京芸術大非常勤講師などを務める。長崎市出身のギター奏者、益田正洋のピアノ伴奏を縁に長崎で演奏活動。本県が舞台の小説「沈黙」などで有名な故遠藤周作氏のファン。長崎への思い入れは深く、県音楽連盟にも所属している。

今年の演奏会のプログラムは「ドイツ3大B」を弾く」がテーマ。大室はドイツのシュトットゥガルト音楽大大学院などで留学生活を過ごした。バッハ、ベートーベン、ブラームスのドイツを代表する3人の偉大な作曲家について現地で学び「3人がそれぞれの時代をどう生き抜いたか。作品を聴くことは音楽の歴史を知ることと強調する。

長崎大管弦楽団と共演するステージが期待される大室晃子
―長崎新聞社

来月19日 長崎大管弦楽団と共演

最終日はベートーベンの五つのコンチェルトの中の大曲「皇帝」を演奏。「作曲家の作品の神髄を伝えるステージにしたい」と張り切る。長崎大管弦楽団の定期演奏会の中で、同楽団と共演。学生オーケストラとともに曲の持つ「堂々とした曲想」をどう表現するか期待される。

▽12月19日の演奏会は、同日午後6時半開演の長崎大管弦楽団定期演奏会（入場料一般1000円、学生500円、中学生以下無料）のプログラムの一つとして開催。枚数限定で特別招待券を配布中。問い合わせは企業メセナ研究会（電095・820・6354）。

長崎新聞の記事（11月22日）

け，11月中旬にシリーズ第１回の時と同様に大きく新聞に掲載してもらったため，掲載日以降，従来とは違って菅家教授のもとに幾つかの問い合わせがあったそうです。メセナ研究会主催のシリーズ演奏会では「特別招待券」があれば無料で入場できるので，入場料が必要な長崎大学管弦楽団の定期演奏会では，長崎大学管弦楽団から「特別招待券」を発行してもらい，メセナ研究会の「特別招待券」と交換することができるという仕組みにしました。

10月のソロ・室内楽の演奏会も終わってあとはコンチェルトを残すのみとなってから，「皇帝」の本格的な練習に取り組みました。アマチュアのオーケストラはプロとは違って，ピアノ演奏を交えたリハーサルを何度もしなくてはならないので，練習のため11月から２度ほど長崎を訪れました。指揮者の河地良智氏の厳しい指導の下で，音楽演奏以外の職業を目指す学生達の熱意溢れる音楽に感動しながら本番を迎え，無事シリーズを完結することができました。

注

2．ゲネ・プロとはドイツ語の Generalprobe の日本語版略語で，総練習を意味する業界語である。

４．第４回目の総括

ここで，実験的企業メセナの最終回について簡単に総括する。

①第３回目から「特別招待券」方式を始めたが，これはスポンサーに寄付をする意味を考える機会を与えたように思われる。メセナについて少しは企業の理解が進んだのではないだろうか。「記念館」での恒例のアンケートでも，メセナについての認知度が上昇している（第１回目では回答者の76%が知らないとしていたが，今回は56%が知っていると答えている）。

②このメセナシリーズを通して最大の要因は財務的問題である。しかも，今

回はリーマン・ショックに輪を掛けられて長崎の経済状況はさらに悪化したからなおさらである。常連であったが今回は降りたスポンサーもあったし，減額したスポンサーもあった。しかし税理士事務所などの新たなスポンサーを確保することができた。また，有難いことに昨年と同じように寄付して頂いた企業もあった。

③「特別招待券」方式は地方の企業メセナ推進にとって有効である，と思われる。数社でメセナをするには負担が重いが，少額でも多数の地場企業が出資すれば（メセナは一種の社会投資である），それなりの活動ができるし，それに応じて配付される「招待券」の有効な使い方ができる。（参考だが，上のアンケート調査では約93％が企業はメセナをすべしと回答している）

５．シリーズ全体を通した総括

第１回

①第１回目は準備不足ということもあって，「企業メセナ」と位置づけることは出来ない。強いて言えば「間接的企業メセナ」と言えるかも知れないが，やはりアカデミック・メセナと位置づけざるを得ないであろう。

②初めての試みなので，まさに試行錯誤的実施であった。初めてにしては結構聴衆が集まったが，これはマスコミによる報道が強く影響したせいであると思われる。

第２回

①長崎方式の導入：長崎の現状を考えて，数社のスポンサー企業から資金を集め，その実施は「研究会」で行う方式にした。第１回同様，企業の理解を得るのに苦労した。

②一回目で上手くいったので気が緩んだのか，日程の設定での決定的ミスを犯してしまった。また，長崎音楽祭(注1)と重なってしまったのも間違

いであった。情報収集の点で大いに反省すべし，である。

③スポンサー企業の反応：一応，資金は企業が提供したがおつきあいのようであり，形式的には「企業メセナ」の様相を呈しているが，企業経営上の活動とは言えないであろう。

④ある地元企業からは何らかの企業メセナ推進の組織を作ろうという提案があったのは，収穫であった。

注

1．県主導で2007年から始まった，長崎在住あるいは長崎出身の音楽家を主軸とする音楽祭で，夏から秋にかけて開催された。

第３回

①スポンサー企業選択の失敗：地元企業ではメセナの趣旨に理解を得るのは困難と考え中央企業の長崎事業所に注目した。理解はあったが地方事業所であるので，権限や資金の点で限界があり困難であった。批判もされたが，その批判は当たっていると報告者も同調した。

②「特別招待券」の導入：新たに，無料の「特別招待券」を作成しスポンサー企業に出資に按分比例して配付した。これは何らかの反応を企業側にもたらしたようである。

③メセナ活動に理解ある経営者の存在が確認できたことは，大きな成果である。また，上述のようにメセナの長崎方式とも言うべき推進組織の提案が企業側から提示されたのも，大きな喜びである。②と組み合わせれば立派なメセナ推進組織が構築できよう。問題は，誰がリーダーシップを取るか，である。幕府の直轄地であった長崎では，全てがお上頼みであり，企業メセナも県が取り仕切っている。長崎ランタン・フェステバル(注2)のように，民間から自発的に始まらなければ，企業メセナの発展はないであろう。（同じくアンケートでは，約56％が長崎企業はメセナをすべしと回答している）

第４回

①原点回帰：原点に帰って地元企業に重点を置いた。不況の折，スポンサー企業を探すのに苦労したが，例年以上の数の企業をスポンサーとして確保できたし，資金も目標には届かなかったが例年以上の資金を集める事が出来た。

②理解度の高まり：出資企業も少しずつ「企業メセナ」についての理解度が高まっているのが体得できた。３回目あたりから企業メセナらしくなってきたが，第４回は「企業メセナ・長崎方式」が出来たと言えるのではないか，と思われる。

最後に主役である大室のコメントを載せる。

独奏者のコメント：

４年間のシリーズを終えてこのシリーズも菅家先生のご退職と共に今回で終了しました。４年に渡るシリーズを通して，演奏家としての責任感－長い年月に渡って遺された芸術作品を次の世代へ伝えていくこと，あるいはこれから遺っていくことになる作品を正しい形で伝えていくことなどを改めて感じました。そして演奏会場で舞台に立った以上は，聴衆とのコミュニケーションを図ることが最重要である，ということも強く実感しています。

４回を試行錯誤でやってきて，やっと軌道に乗り始めたところであり，毎年楽しみに聴きに来られる方も多く，今回で終了するのは少し寂しい気がしますが，このシリーズを通してずっと見守り協力して下さった方々とのご縁は今後ともぜひ大切にしたいと思います。音楽はよく，人と人とをつなぐもの，人と時代をつなぐものと言われます。何百年もの歴史の中を生き抜いた音楽を，ひとつの空間で多くの人と一緒に直接に触れ合うことができるのはとても幸せなことです。しかしこの不景気の最中，なかなか

そのような演奏の機会がないというのが現状なので，例え小さな企画であっても，今回のシリーズのように地元の企業が先頭に立って実現可能にして下さったら，本当に素晴らしいことだと思います。地域に密着している企業が，そこに生活している人たちに質の良い演奏会を提供することはとても意義深いことではないでしょうか。

そしてこのシリーズのように，様々な方々に支えられて実現した演奏会を体験して感じるのは，演奏家は演奏に全力を尽くす，という当たり前にして最大の任務です。演奏会を企画して下さる企業，個人など様々な方々が，企画の大変さや経済的な問題など様々な難題に直面した時，「あの演奏家のためならぜひ」「この演奏会は絶対に素晴らしいものになる」と思わせるほどの信頼を得られることが，演奏家の価値なのだと痛感しています。

最後に，スポンサーとなって頂いた企業，団体の皆々様，そして大変な企画をほぼお一人で進めて下さった菅家教授に心から御礼申し上げます。

第４回目の開催にかかった費用は，演奏代，人件費，交通費，宿泊費，印刷費，会場費などで約110万円弱であり，およそ20万円強の赤字となった。不足分は「研究会」の寄付金で補填した。

注

２．長崎在住の華僑の人たちが旧正月を祝って始まった行事。最初は少数の仲間たちでの私的なお祝い事であったが，段々と参加者も増え，盛大になって，ついには長崎市も採り上げ，冬の長崎を代表する観光行事となった。

以上